

平成30年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成31年3月27日

報告者	学科名	看護学科	職名	特任教授	氏名	二宮 一枝
研究課題	屋根瓦方式による認知症カフェを用いた修士課程における保健師教育の開発					
研究組織	氏名	所属・職	専門分野	役割分担		
	代表	二宮 一枝	保健福祉学部看護学科	地域看護	統括：企画・実施・評価	
	分担者	親 雅子 光山由美子 森 亮介	総社市東部北地域包括支援センター	地域看護 介護福祉 社会福祉	学生指導：企画・実施・評価	
		笹尾友香 中田弥沙 中村友樹	保健福祉学研究科 看護学専攻保健師課程	公衆衛生看護	後輩指導：企画・実施・評価	
	大村真由 小野薫 後藤瑞貴 佐藤鈴菜 西百々佳 松田安奈 村田未来			企画・実施・評価		
研究実績の概要	<p>【背景】修士課程における保健師教育は、看護師免許を有する院生が、修士としての研究能力と保健師国家試験受験資格を取得するため、多様なカリキュラムが可能である。修了生の高い実践能力に関する報告も散見されるが、研究蓄積は不十分である。そこで、平成29年度の公衆衛生看護診断論・演習は、総社市東部北包括支援センター（以下、包括）保健師の要請もあり、院生・包括3職種と保健師経験を有する教員が、協働して総社市の行政課題の1つである認知症カフェを年間6回、企画・運営するというプログラムを開発した。経費については、包括・大学・参加費の他、総社市の認知症カフェ開設補助（3年間の実施や有資格者スタッフ数の要件あり）を包括が受けた。</p> <p>1～5回目までの分析では、院生は看護師免許を有するスタッフとして、状況的学習における正統的周辺参加から、その都度生起する役割を通じて知識の再構成やアイデンティティ等を含む成員性を身につけて、アセスメント力と当事者グループ支援能力の習得を確認できた（二宮2018）。しかし、カリキュラム上設定した、6回目の十全参加については分析が残されている。</p> <p>また、学士課程においては「岡山創生学」の一環として3年次生対象の地域保健福祉演習が平成30年度から開講されることになった。そこで、平成30年度の中期計画では、昨年度の単位取得者（M2）が後輩を指導して学修の深化を図ることが可能な屋根瓦方式の試行による修士課程と学士課程の効果的な接続を中期計画に位置付けた。</p>					

※ 次ページに続く

研究実績
の概要

【目的】認知症カフェを用いた公衆衛生看護診断論・演習のプログラムが、正統的周辺参加から十全参加に至ったか、卒業時到達度等の客観評価を行い、公衆衛生看護学教育モデル・コアカリキュラム（2017）等に照らして修士課程保健師教育の精錬を図る。同時に屋根瓦方式を試行し、学士課程の地域保健福祉演習との効果的な接続を図る。

【方法・結果】まず、平成29年度実施の6回目十全参加について、公衆衛生看護学教育モデル・カリキュラム（2017）に照らして分析し、修士課程における保健師実践能力を明らかにした（教育研究紀要投稿）。また、日本地域看護学会自由集会「院生倶楽部」にM1の2名が参加し、全国の修士課程に学ぶ保健師学生との交流を通し、本学の教育への提言を行った。教員は全国保健師教育機関協議会中国四国ブロック研修会で「修士課程における保健師教育の実際」について話題提供し、日本公衆衛生学会で発表した。これらのことにより、本学の特色あるプログラムは、公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラムの「A 保健師として求められる基礎的な資質・能力」が修得可能であることが確認できた。院生は看護師免許を有する自覚と責任から、指導者の指導下で住民が学生にケアを委ねることが可能な状況を創出し、地域貢献に寄与できたことが明らかとなった。

次に、認知症カフェを用いた公衆衛生看護診断論及び同演習を4月～2月に6回開講し、講義とフィールドワーク（訪問・地区踏査等）とカフェの企画運営とを連動させ、一連の過程をCBPR（community-based participatory research＝コミュニティを基盤とした参加型リサーチ）により実施した。保健師としての倫理について十分な指導を行い、学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号18-03）。毎回、包括3職種・教員と院生で、打ち合わせして実施した。M1は、打ち合わせや反省会の議事録を作成し、教員が確認した後、包括に報告しスタッフ間で共有した。他の関連科目の学修をいかし、カフェ評価表（個人・集団）を作成し試行した結果、アセスメントや方針の共有に有効と考えられた。関連科目授業として、地域アセスメント結果からの施策化提案については市担当課職員の助言を得ることができ、学修の深化発展につながった。

一方、学士課程との接続については、地域保健福祉演習履修の3年生は3回目（8月）に正統的周辺参加をした。事前に、教員の講義をうけ、M2がTAとしてガイダンスした。さらに、6回目（2月）は、次年度入学予定の本学4年生が、昨年度の実施報告書を教材としたガイダンスの後に、正統的周辺参加をした。

以上の概要は、実施報告書にまとめ、次年度のOPUでポスター発表予定である。

【今後の課題】カフェ評価表（個人・集団）の活用含め、M1はTAとして次年度に引継ぎ、屋根瓦方式により、精錬する必要がある。また、施策化を含む関連科目との進度を考慮した到達状況の分析については今後の課題である。さらに、修士課程と学士課程の効果的な接続の検証等が残されている。加えて、次年度で、総社市の認知症カフェ開設補助の要件である3年間の実施は完遂できると見込まれる。しかし、今後は当事者・利用者ニーズと包括の方針等ふまえ、大学院としてのカリキュラム構築の検討が残されている。